



## 若者の献血行動を促進する効果的な教育プログラムに関する研究

研究分担者

大川 聡子 (大阪府立大学 地域保健学域看護学類)

研究協力者

安本 理抄 (大阪府立大学 地域保健学域看護学類)

根来佐由美 (大阪府立大学 地域保健学域看護学類)

上野 昌江 (大阪府立大学 地域保健学域看護学類)

眞壁 美香 (大阪府立大学大学院 看護学研究科博士前期課程)

川口 広志 (大阪府赤十字血液センター 南大阪事業所事業課)

藤原 弘明 (大阪府赤十字血液センター 南大阪事業所事業課)

林 雅人 (大阪府赤十字血液センター 南大阪事業所事業課)

森 とも子 (大阪府藤井寺保健所 薬事課)

松田 岳彦 (大阪府藤井寺保健所 薬事課)

山内 祥子 (大阪府藤井寺保健所 薬事課)

酒井 典子 (大阪府藤井寺保健所 企画調整課)

### 研究要旨

本研究の目的は、若者の献血及び輸血に対する意識について調査を行い、若者の献血行動や献血への意識を踏まえた効果的な献血啓発方法を明らかにすることである。今年度は若者の献血行動や献血への意識を把握するために、献血・輸血に関するアンケートを複数大学の学生に対して実施した結果を集計した。回答者数は910名。

学部による献血経験や献血への興味の違いに着目し、分析を行った。その結果、他学部生と比較して看護学生は献血の経験率が高く、献血に関する知識をもつ者が多かった。また他者に献血を勧めていたり、啓発活動に興味をもつ者も多く、献血に対する関心の高さが明らかとなった。看護学生が啓発活動を行うための基盤を整え、学生が啓発活動を行うことで、献血行動の促進につながることを示唆された。

一方 A 大学学生に対し、大阪府赤十字血液センター南大阪事業所および大阪府藤井寺保健所薬事課・企画調整課と連携し、献血ボランティア養成講座を開催した。活動は自主サークル化し、学生ボランティア主体の取り組みが始まっている。

### 1. 献血・輸血に関するアンケートの実施

#### 研究目的

血液の安定的な確保のために、献血の意義や献血機会の拡大を啓発することは喫緊の課題である。しかし過去20年間で10代・20代の献血者総数は半分以下に減少している。大阪府においても若年層の献血者数の減少は著しく、2006年度から2016年度の11年間で、20代は23%、30代では39%減少している。

本研究では若年層の献血を推進するために大学生に調査を行い、若者の献血行動や献血に関する意識を踏まえた効果的な献血啓発方法を明らかにする。

#### 研究方法

大阪府下の3大学の学生に対し、献血回数、初めて献血した年齢、献血した際の痛み、献血への意識、献血に関する知識等について無記名自記式質問紙調査を

実施した。調査期間は2015年11月～2016年12月。

調査依頼方法は、それぞれの大学に文書と口頭にて研究趣旨および内容を説明して研究協力を依頼し、研究協力の承諾を得た。講義終了後学生に対し、研究の趣旨・内容などを口頭と文書で説明し、調査票を配布し調査協力を依頼した。調査票の記入と、回収箱への投函をもって研究協力の同意を得たものとした。

本研究における「若者」の定義について大辞林第三版(三省堂)の「青年」の定義によると、「14.5歳から24.5歳頃までをいうが、広く30代を含めていう場合もある」としていることから、本研究においては30歳代までを若者と定義し、調査対象とした。

#### (倫理的配慮)

本研究結果は、献血に関する普及・啓発活動以外の目的では使用しないこと、回答は統計的に処理され個人が特定されないこと、回答しないことによる不利益がないこと、回答中止が可能であること等を文書およ

び口頭にて説明した。

本研究に関しては、大阪府立大学大学院看護学研究科研究倫理委員会において承認を得た（承認番号 27-53）。

## 結果

アンケート配布数は 1,079 名、回収数は 921 名（回収率 85.4%）、有効回答数 910 名（有効回答率 84.3%）であった。

10代、20代の回答者がそれぞれ 609 名（66.9%）、291 名（32.0%）と多くを占めていた。回答者の平均年齢は 19.4 ± 1.7 歳であった。男女別では、女性が 612 名（67.3%）と多かった。家族形態では、家族と同居している人が 674 名（74.1%）と多かった。

表 1 分析対象者の基本属性

		n=910	
		人数	%
年齢	年齢階層区分 10代	609	66.9
	20代	291	32.0
	30代	5	0.5
	無回答	5	0.5
性別	男性	295	32.4
	女性	612	67.3
	無回答	3	0.3
家族形態	一人暮らし	232	25.5
	家族と同居	674	74.1
	無回答	4	0.4

### 1) 献血したいと思った経験

これまでに献血したいと思ったことがあるかについて（n=550 ※）は、「はい」が 220 名（40.0%）、「いいえ」が 330 名（60.0%）であった。

※調査途中で質問項目を加えたため、分析対象者数（n=910）より回答者数が少ない。

### 2) これまでの献血回数

これまで献血したことが「あり」と答えた人は 134 名で全体の 14.7%であった。これまでの献血回数の内訳は「1回」78 名（8.6%）、「2回」23 名（2.5%）、「3～5回」22 名（2.4%）、「6～10回」8 名（0.9%）、「11回以上」3 名（0.3%）であった。

表 2 これまでの献血回数

		n=910	
		人数	%
なし	776	85.3	
1回	78	8.6	
2回	23	2.5	
3～5回	22	2.4	
6～10回	8	0.9	
11回以上	3	0.3	
あり(再掲)	134	14.7	

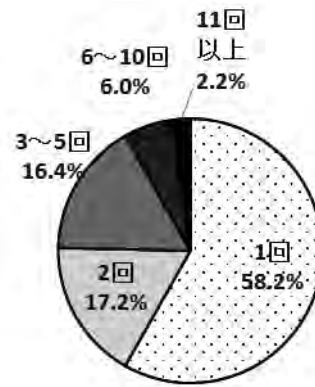


図 1 これまでの献血回数

### 3) 初めて献血した年齢

初めて献血した年齢（n=130）について、平均年齢は 18.4 ± 1.8 歳であった。内訳は 15～17 歳が 34 名（26.2%）、18～19 歳が 73 名（56.2%）、20～24 歳が 21 名（16.2%）、25～29 歳が 2 名（1.5%）であった。

表 3 初めて献血した年齢

年齢	男性	女性	計	%
15～17	11	23	34	26.2
18～19	16	57	73	56.2
20～24	7	14	21	16.2
25～29	1	1	2	1.5
合計	35	95	130	100.0

### 4) 献血した際の痛みの程度

献血した際の痛みの程度（n=130）について、「全く痛みがない」と回答した人は 16 名（12.3%）、「ちょっとだけ痛い」が 71 名（54.6%）、「軽度の痛みがあり少し辛い」が 31 名（23.8%）、「中程度の痛みがあり辛い」が 10 名（7.7%）、「かなりの痛みがありとても辛い」が 1 名（0.8%）、「耐えられないほどの強い痛みがある」が 1 名（0.8%）であった。

表 4 献血した際の痛みの程度

	男性	女性	計	%
全く痛みがない	5	11	16	12.3
ちょっとだけ痛い	18	53	71	54.6
軽度の痛みがあり少し辛い	10	21	31	23.8
中程度の痛みがあり辛い	1	9	10	7.7
かなりの痛みがありとても辛い	0	1	1	0.8
耐えられないほどの強い痛みがある	1	0	1	0.8
合計	35	95	130	100.0

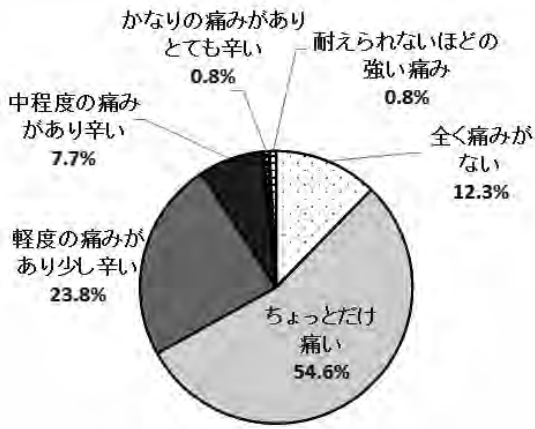


図2 献血した際の痛みの程度

5) 献血をしようと思った理由

献血をしようと思った理由 (n=132) で最も多かったのは、「自分の血液が誰かの役に立ってほしい」81名 (61.4%)、以降「粗品などがもらえるから」53名 (40.2%)、「血液検査の結果を知りたいから」45名 (34.1%)、「近くに献血車が来たから」35名 (26.5%)、「友人に誘われたから」32名 (24.2%)、「なんとなく」25名 (18.9%)、「輸血用の血液が不足しているから」23名 (18.3%)、「将来自分や家族が輸血を受けることがあるかもしれないから」20名 (15.2%)、「過去に家族などが輸血を受けたことがあるから」15名 (11.4%)、「習慣になっているから」4名 (3.0%) であった。

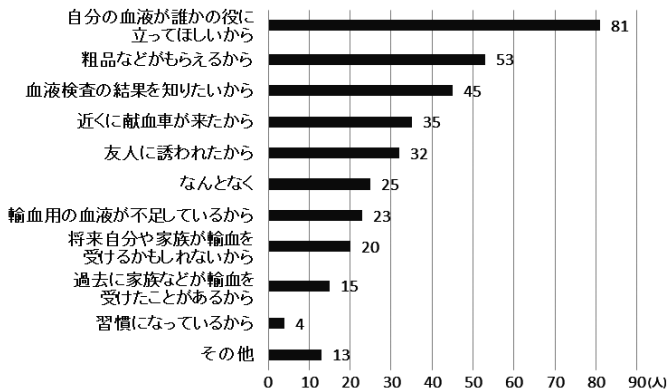


図3 献血をしようと思った理由 (複数回答)

6) 献血したいができなかった経験の有無

これまで献血したいと思ったができなかった経験について、「ある」と答えた人は 193 名で全体の 21.2% であった。

「ある」と答えた人 193 名の理由については「血色素量が低い」が 60 名 (31.1%) と最も多く、「服薬している」29 名 (15.0%)、「体重が基準に満たない」26 名 (13.5%)、「献血制限のある国への渡航歴がある」8 名 (4.1%)、「一定期間内に予防接種を受けた」6 名 (3.1%)、「血圧が高い」5 名 (1.5%)、「献血間隔が短い」4 名 (2.1%)、「輸血を受けた」3 名 (1.6%) であった。(注: 「体重が基準に満たない」「一定期間内に予防接種

を受けた」「輸血を受けた」の回答項目は途中追加項目) その他 66 名 (34.2%) の内訳としては、時間がかかる、体調不良、治療中等の理由であった。

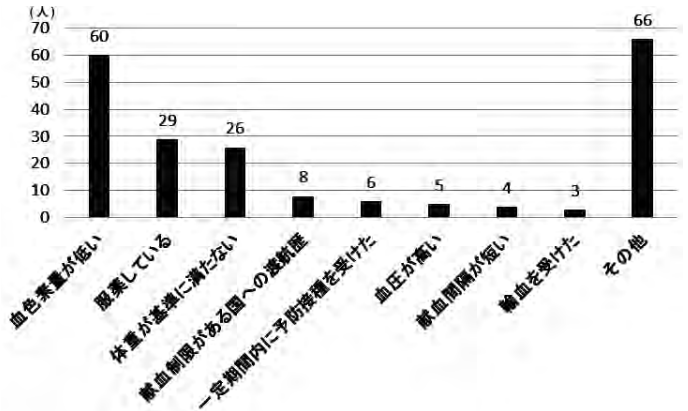


図4 献血できなかった理由 (複数回答)

7) 献血車等の情報入手経路

献血車等の情報入手経路 (n=745) で最も多かったのは、「ポスター」340 名 (45.6%) であった。以降、「口コミ」159 名 (21.3%)、「ネット・スマホ・携帯」98 名 (13.2%)、「校内放送」58 名 (7.8%)、「テレビ」21 名 (2.8%)、「新聞」7 名 (0.9%)、「雑誌」3 名 (0.4%)、「ラジオ」2 名 (0.3%)、「その他」154 名 (19.5%) であった。

その他の内訳としては、「実際に来ているのを見かける」、「呼び込み」等であった。

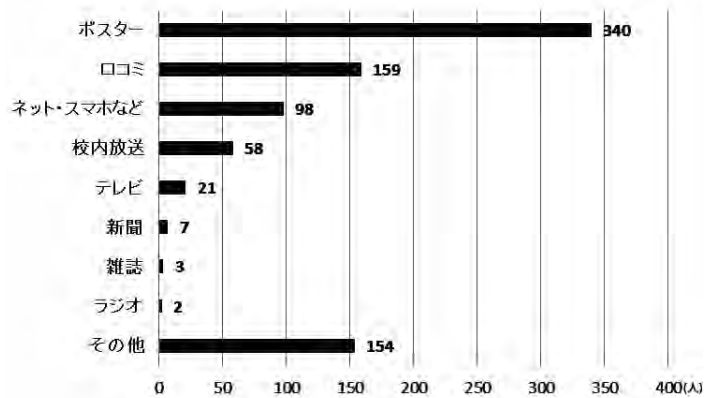


図5 献血車等の情報入手経路 (複数回答)

8) 若年層の献血件数に関する認知

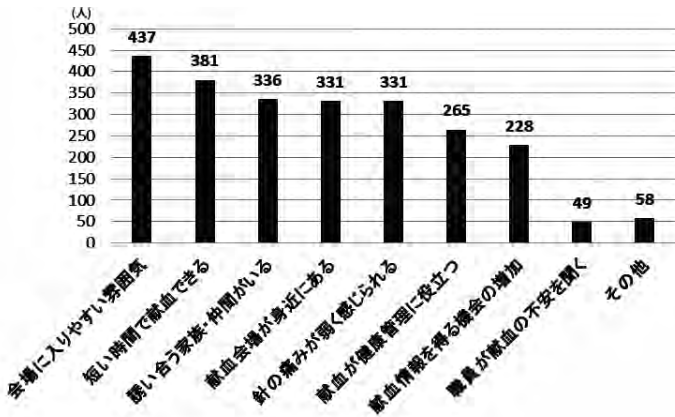
最近若年層の献血件数が減少していることを知っていますか、という設問では「はい」と答えた人が 384 名 (42.4%)、「いいえ」と答えた人が 521 名 (57.6%) であった (n=905)。

9) 献血をする人が増えると思う取り組み

献血をする人が増えると思う取り組み (n=901) について、「会場に入りやすい雰囲気」が 437 名 (48.5%) と最も多く、以降「短い時間で献血できる」381 名 (42.3%)、「誘い合う家族・仲間がいる」336 名 (37.3%)、

「献血会場が身近にある」331名(36.7%)、「針の痛みが弱く感じられる(麻酔など)」331名(36.7%)、「献血が自分の健康管理に役立つ」265名(29.4%)、「献血の情報を得る機会が増える」228名(25.3%)、「職員が献血の不安を聞いてくれる」49名(5.4%)、その他58名(6.4%)であった。

図6 献血をする人が増えると思う取り組み(複数回答)



10) 献血を他の人にも勧めているか

献血を他の人にも勧めていますか、という設問では「はい」と答えた人は105名(11.7%)、「勧めたいと思うが実際にはない」214名(23.9%)、「いいえ」575名(64.3%)であった。

表5 献血を他の人にも勧めているか

	人数	%
はい	105	11.7
勧めたいと思うが実際にはない	214	23.9
いいえ	575	64.3
合計	894	100.0

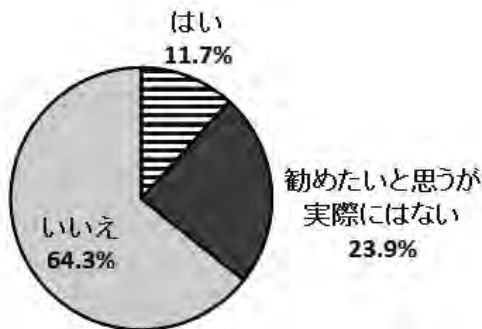


図7 献血を他の人にも勧めているか

11) 献血を誰に勧めているか

献血を他の人に勧めたことがある人(n=105)に対し、献血を誰に勧めているかについて、「友人」と答えた人が89名(84.8%)と最も多く、次いで「家族」34名(32.4%)、「恋人」11名(10.5%)、「知人」4名(3.8%)、「親戚」「職場の人」「その他」各2名(各1.9%)であった。

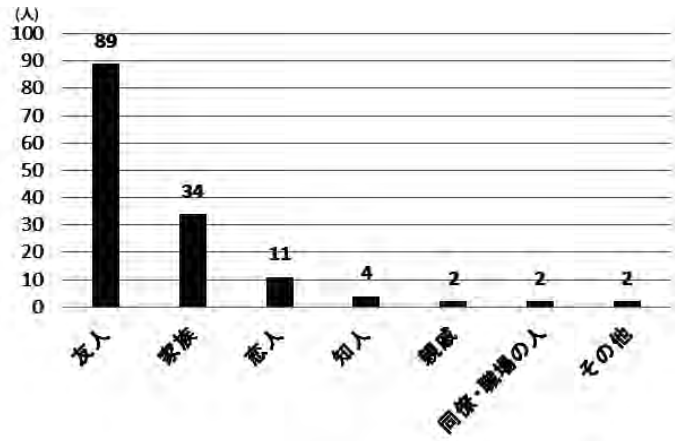


図8 献血を誰に勧めているか(複数回答)

12) 他の人に献血を勧めない理由

献血を他の人に勧めたことがあるかの設問で、「実際に勧めたことはない」「いいえ」という人(n=789)に対し、他の人に献血を勧めない理由は、「なんとなく」273名(34.6%)、「自分も献血をしたくない」151名(19.1%)、「忘れてしまう」95名(12.0%)、「面倒くさい」92名(11.7%)、「勧める相手がいない」68名(8.6%)、「時間がかかる」46名(5.8%)、「気恥ずかしい」23名(2.9%)、「場所が遠い」21名(2.7%)であった。

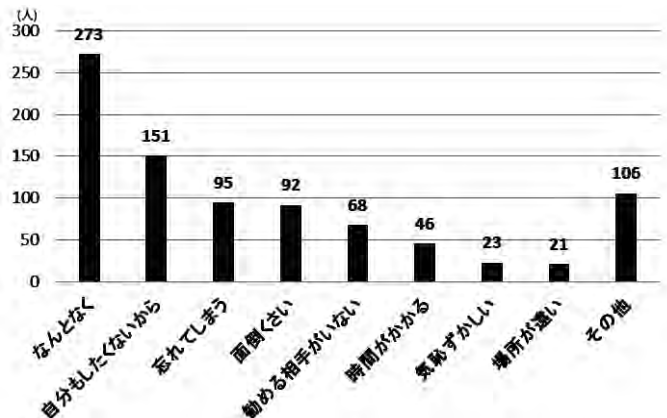


図9 他の人に献血を勧めない理由(複数回答)

13) 献血を敬遠しがちになる理由

献血を敬遠しがちになる理由について、「あり」と答えた人は494名(55.2%)、「なし」と答えた人は401名(44.8%)であった。

「あり」と答えた人の理由は「なんとなく不安」が175名(35.4%)と最も多く、次いで「針を刺すのが痛くて嫌だから」162名(32.8%)、「恐怖心」142名(28.7%)、「時間がかかる」125名(25.3%)、「献血する時間がない」80名(16.2%)、「献血している場所に入りづらかった」77名(15.6%)、「血をとられるのが嫌だ」73名(14.8%)、「健康上できないと思った」55名(11.1%)、「どこで献血できるかわからない」18名(3.6%)、「その他」81名(16.4%)であった。

その他の内訳としては、貧血であるため、採血が苦手、体重不足等であった。

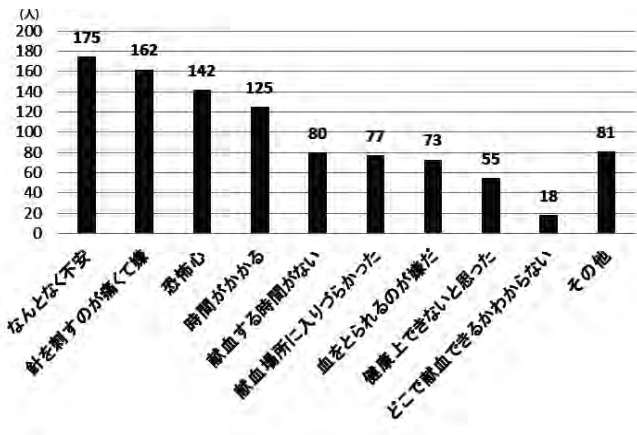


図 10 献血を敬遠しがちになる理由（複数回答）

14) 輸血を受ける場合の気持ち

自分が輸血を受けたと想定して、考えにあてはまるものを選択した結果を図 11 に示す。

「輸血したことで体調が良くなる」について「大変そう思う～少しそう思う」が 649 名 (72.9%)、「思わない」が 241 名 (27.1%)。

「輸血したことで体に力が満ちてくる」について「大変そう思う～少しそう思う」が 588 名 (66.2%)、「思わない」が 300 名 (33.8%)。

「輸血したことで心に力が満ちてくる」について「大変そう思う～少しそう思う」が 646 名 (72.9%)、「思わない」が 240 名 (27.1%)。

「輸血したことで命が助かる」について「大変そう思う～少しそう思う」が 878 名 (98.9%)、「思わない」が 10 名 (1.1%)。

「輸血したことで治療（手術など）がうまくいく」について「大変そう思う～少しそう思う」が 861 名 (97.0%)、「思わない」が 27 名 (3.0%)。

「治療に必要であっても輸血はしたくない」について「大変そう思う～少しそう思う」が 264 名 (29.7%)、「思わない」が 625 名 (70.3%)。

「輸血はもったいないから 1 滴も無駄にできない」について「大変そう思う～少しそう思う」が 644 名 (72.9%)、「思わない」が 240 名 (27.1%)。

「輸血は時間がかかって苦痛だ」について「大変そう思う～少しそう思う」が 579 名 (65.3%)、「思わない」が 308 名 (34.7%)。

「じんま疹などの輸血の副作用が心配だ」について「大変そう思う～少しそう思う」が 750 名 (84.4%)、「思わない」が 139 名 (15.6%)。

「輸血したことで病気に感染することが心配だ」について「大変そう思う～少しそう思う」が 759 名 (85.4%)、「思わない」が 130 名 (14.6%)。

「輸血してくれる人は善意がある」について「大変そう思う～少しそう思う」が 872 名 (97.9%)、「思わない」が 19 名 (2.1%)。

「輸血を受けた人は、献血してくれた人に感謝している」について「大変そう思う～少しそう思う」が 854 名 (96.2%)、「思わない」が 34 名 (3.8%)。

「輸血を受けた人は、献血の重要性がわかる」について「大変そう思う～少しそう思う」が 873 名 (98.2%)、「思わない」が 16 名 (1.8%)。

「輸血の重要性を知らない人が多い」について「大変そう思う～少しそう思う」が 861 名 (96.7%)、「思わない」が 29 名 (3.3%) であった。

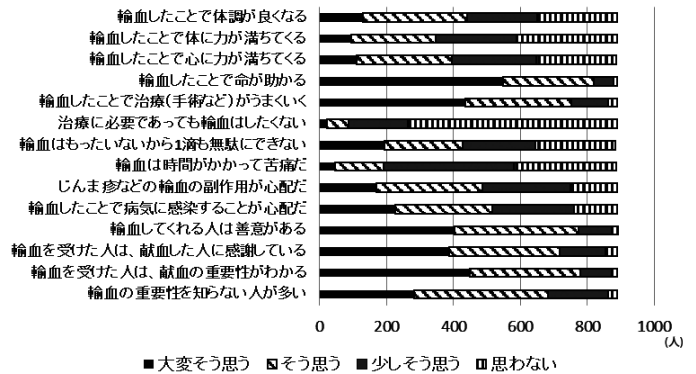


図 11 輸血を受ける場合の気持ち

15) 大阪府内献血ルームにおけるイベントの認知

大阪府内献血ルームで行っているイベントの認知 (n=910) については、「献血後にアイスクリームサービス」が 208 名 (22.9%) と最も多く、次いで「抹茶でくつろぎタイム」77 名 (8.5%)、「ヘッドマッサージ」47 名 (5.2%)、「アロマセラピー」35 名 (3.8%)、「ネイルケア」33 名 (3.6%)、「パーソナルカラー診断」24 名 (2.6%)、「手相占い」23 名 (2.5%)、「タロット占い」22 名 (2.4%)、「耳つぼマッサージ」20 名 (2.2%)、「似顔絵プレゼント」12 名 (1.3%)、「メイクのアドバイス」8 名 (0.9%)、「インディーズアーティストのライブ」「カイロプラクティック」各 7 名 (0.8%)、「ファイナンシャルプランニング」「ボディジュエリー」各 3 名 (各 0.3%) であった。

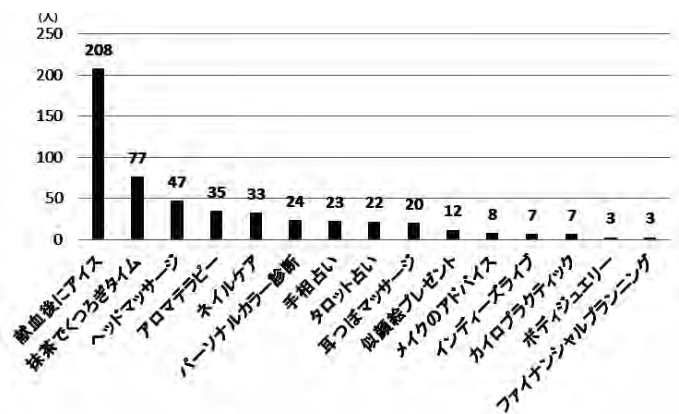


図 12 大阪府内献血ルームのイベント認知（複数回答）

16) 献血を広める活動への参加希望

献血を広める活動に参加したいと思いませんか、という設問で「はい」と答えた人が358名(41.9%)、「いいえ」と答えた人が496名(58.1%)であった。

表6 献血を広める活動への参加希望

	人数	%
はい	358	41.9
いいえ	496	58.1
合計	854	100.0

17) 学部別の性別内訳

看護学生と他学部生に区分した。看護学生は男性12名(5.1%)、女性225名(94.9%)、他学部生は、男性281名(42.2%)、女性385名(57.8%)であり、性別の割合に大きく差があった。このため、以降女性のみを学部別傾向も併せて示す。

表7 学部区分別の性別内訳

	看護学生		他学部生		合計
	人数(%)	人数(%)	人数(%)	人数(%)	
男性	12(5.1)	281(42.2)	293(32.4)		293(32.4)
女性	225(94.9)	385(57.8)	610(67.6)		610(67.6)
合計	237(100.0)	666(100.0)	903(100.0)		903(100.0)

18) 学部区分別の献血経験

学部区分別の献血経験割合は、他学部生に比べ、看護学生のほうが献血経験ありの割合が有意に高く(p<0.001)、女性のみでも同様の結果であった。

表8 学部区分別の献血経験の有無

項目		合計		看護学生		他学部生		p値
		人数(%)	人数(%)	人数(%)	人数(%)	人数(%)	人数(%)	
献血経験	あり	132(14.6)	58(24.5)	74(11.1)				<0.001
	なし	771(85.4)	179(75.5)	592(88.9)				
献血経験(女性のみ)	あり	95(15.6)	53(23.6)	42(10.9)				<0.001
	なし	515(84.4)	172(76.4)	343(89.1)				

19) 学部区分別の献血ルーム(献血車)の場所認知

学部区分別の献血ルーム(献血車)の場所認知について、看護学生の方が他学部生と比較して「知っている」と答えた者が有意に多かった(p<0.001)。女性のみにおいても同様の結果であった。

表9 学部区分別献血ルームの場所認知

項目		合計		看護学生		他学部生		p値
		人数(%)	人数(%)	人数(%)	人数(%)	人数(%)	人数(%)	
献血場所を知っている(N=898)	はい	432(48.1)	142(59.9)	290(43.9)				<0.001
	いいえ	466(51.9)	95(40.1)	371(56.1)				
献血場所を知っている(女性のみ)	はい	321(52.8)	135(60.0)	186(48.6)				0.006 **
	いいえ	287(47.2)	90(40.0)	197(51.4)				

\*: p<0.05 \*\*: p<0.01

20) 学部区分別の献血に関する知識

学部区分別の献血に関する知識について、若年層の献血減少を知っている者は学部区分による差はなく、成分献血の基準を知っている者は看護学生が有意に多かった(p<0.001)。

表10 学部区分別の献血に関する知識

項目		合計		看護学生		他学部生		p値
		人数(%)	人数(%)	人数(%)	人数(%)	人数(%)	人数(%)	
若年層の献血減少を知っている(N=899)	はい	383(42.6)	110(46.4)	273(41.2)				0.167
	いいえ	516(57.4)	127(53.6)	389(58.8)				
若年層の献血減少認知(女性のみ)	はい	274(45.0)	104(46.2)	170(44.3)				0.640
	いいえ	335(55.0)	121(53.8)	214(55.7)				
成分献血の色素量基準値認知(N=881)	はい	86(9.8)	50(22.1)	36(5.5)				<0.001
	いいえ	795(90.2)	176(77.9)	619(94.5)				
成分献血の色素量基準値認知(女性のみ)	はい	75(12.6)	49(22.9)	26(6.9)				<0.001
	いいえ	518(87.4)	165(77.1)	353(93.1)				

21) 学部区分別の献血情報の入手経路

献血情報の入手経路について、「ポスター」と回答したのは看護学生が有意に多く(p<0.001)、「インターネット・スマホ・携帯」(p<0.05)および「校内放送」(p<0.001)は他学部生が有意に多かった。

表11 学部区分別献血情報の入手経路

項目		合計		看護学生		他学部生		p値
		人数(%)	人数(%)	人数(%)	人数(%)	人数(%)	人数(%)	
1. ポスター	はい	337(45.4)	115(60.5)	222(40.2)				<0.001
	いいえ	405(54.4)	75(39.5)	330(59.8)				
2. ネット・スマホ等	はい	98(13.2)	17(8.9)	81(14.7)				0.044 *
	いいえ	644(86.6)	173(91.1)	471(85.3)				
3. テレビ	はい	21(2.8)	8(4.2)	13(2.4)				0.183
	いいえ	721(97.2)	182(96.8)	539(97.6)				
4. ラジオ	はい	2(0.3)	0(0.0)	2(0.4)				0.553
	いいえ	740(99.7)	190(100.0)	550(99.6)				
5. 新聞	はい	7(0.9)	2(1.1)	5(0.9)				0.571
	いいえ	735(99.1)	188(98.9)	547(99.1)				
6. 雑誌	はい	3(0.4)	2(1.1)	1(0.1)				0.163
	いいえ	739(99.6)	188(98.9)	551(99.8)				
7. 口コミ	はい	159(21.4)	43(22.6)	116(21.0)				0.639
	いいえ	583(78.6)	147(77.4)	436(79.0)				
8. 校内放送	はい	58(7.8)	3(1.6)	55(10.0)				<0.001
	いいえ	684(92.2)	187(98.4)	497(90.0)				

\*: p<0.05 \*\*: p<0.01

22) 学部区分別の献血理由

献血をしようと思った理由について、学部区分別で有意な差は見られなかった。

表12 学部区分別の献血理由

項目		合計		看護学生		他学部生		p値
		人数(%)	人数(%)	人数(%)	人数(%)	人数(%)	人数(%)	
自分の血液が誰かの役に立ってほしいから	はい	80(60.6)	40(69.0)	40(54.1)				0.082
	いいえ	52(39.4)	18(31.0)	34(45.9)				
輸血用の血液が不足しているから	はい	22(16.7)	10(17.2)	12(16.2)				0.875
	いいえ	110(83.3)	48(82.8)	62(83.8)				
血液検査の結果を知りたいから	はい	45(34.1)	17(29.3)	28(37.8)				0.305
	いいえ	87(65.9)	41(70.7)	46(62.2)				
粗品などがもらえるから	はい	53(40.2)	25(43.1)	28(37.8)				0.540
	いいえ	79(59.8)	33(56.9)	46(62.2)				
習慣になっているから	はい	4(3.0)	2(3.4)	2(2.7)				0.594
	いいえ	128(97.0)	56(96.6)	72(97.3)				
過去に家族が輸血を受けたことがあるから	はい	15(11.4)	6(10.3)	9(12.2)				0.744
	いいえ	117(88.6)	52(89.7)	65(87.8)				
将来自分や家族が輸血を受けるかもしれないから	はい	19(14.4)	9(15.5)	10(13.5)				0.745
	いいえ	113(85.6)	49(84.5)	64(86.5)				
なんとなく	はい	25(18.9)	10(17.2)	15(20.3)				0.659
	いいえ	107(81.1)	48(82.8)	59(79.7)				
近くに献血車が来たから	はい	35(26.5)	19(32.8)	16(21.6)				0.150
	いいえ	97(73.5)	39(67.2)	58(78.4)				
友人に誘われたから	はい	31(23.5)	17(29.3)	14(18.9)				0.162
	いいえ	101(76.5)	41(70.7)	60(81.1)				

23) 学部区分別の献血できなかった経験の有無

献血できなかった経験の有無について、女性のみでみた場合、学部区分別で有意な差は見られなかった。

表13 学部区分別の献血できなかった経験の有無

項目		合計		看護学生		他学部生		p値
		人数(%)	人数(%)	人数(%)	人数(%)	人数(%)	人数(%)	
献血できなかった経験	あり	190(34.7)	90(40.0)	100(31)				0.029 *
	なし	358(65.3)	135(60.0)	223(69)				
献血できなかった経験(女性のみ)	あり	165(38.0)	85(39.7)	80(36.4)				0.471
	なし	269(62.0)	129(60.3)	140(63.6)				

\*: p<0.05 \*\*: p<0.01

24) 学部区分別の献血を敬遠しがちになる理由

献血を敬遠しがちになる理由が「ある」と回答した者は、看護学生より他学部生の方が有意に多かった ( $p < 0.01$ )。また、敬遠する理由は、「時間がかかる」、「献血する時間がない」、「どこで献血できるかわからない」と回答した者は、看護学生が有意に多かった。

表 14 学部区分別の献血を敬遠しがちになる理由の有無

項目	合計		看護学生		他学部生		p値
	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	
献血を敬遠しがちになる理由	あり	490 (55.2)	104 (44.4)	386 (59.0)			<0.001
	なし	398 (44.8)	130 (55.6)	268 (41.0)			
献血を敬遠しがちになる理由 (女性のみ)	あり	329 (54.6)	101 (45.5)	228 (59.8)			0.001 **
	なし	274 (45.4)	121 (54.5)	153 (40.2)			

\*:  $p < 0.05$  \*\*:  $p < 0.01$

表 15 学部区分別の献血を敬遠する理由

項目	合計		看護学生		他学部生		p値
	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	
なんとなく不安	はい	173 (35.5)	35 (33.7)	138 (35.9)			0.666
	いいえ	315 (64.5)	69 (66.3)	246 (64.1)			
針を刺すのが痛くて嫌だから	はい	161 (33)	30 (28.8)	131 (34.1)			0.311
	いいえ	327 (67)	74 (71.2)	253 (65.9)			
時間がかかる	はい	123 (25.2)	35 (33.7)	88 (22.9)			0.025 *
	いいえ	365 (74.8)	69 (66.1)	296 (77.1)			
献血する時間がない	はい	80 (16.4)	30 (28.8)	50 (13.0)			<0.001
	いいえ	408 (83.6)	74 (71.2)	334 (87.0)			
どこで献血できるかわからない	はい	18 (3.7)	8 (7.7)	10 (2.6)			0.021 *
	いいえ	470 (96.3)	96 (92.3)	374 (97.4)			

\*:  $p < 0.05$  \*\*:  $p < 0.01$

25) 学部区分別の献血者が増えると思う取り組み

献血者が増えると思う取り組みについては、「献血会場が身近にある」 ( $p < 0.001$ )、「誘い合う家族・仲間がいる」 ( $p < 0.01$ ) の回答において看護学生の割合が多かった。

表 16 学部区分別の献血者が増えると思う取り組み

項目	合計		看護学生		他学部生		p値
	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	
献血会場が身近にある	はい	329 (36.8)	125 (52.7)	204 (31.1)			<0.001
	いいえ	565 (63.2)	112 (47.3)	453 (68.9)			
誘い合う家族・仲間がいる	はい	333 (37.2)	115 (48.5)	218 (33.2)			<0.001
	いいえ	561 (62.8)	122 (51.5)	439 (66.8)			
献血会場に入りやすい雰囲気	はい	432 (48.3)	134 (56.5)	298 (45.4)			0.003 **
	いいえ	462 (51.7)	103 (43.5)	359 (54.6)			
献血情報を得る機会が増える	はい	226 (25.3)	78 (32.9)	148 (22.5)			0.002 **
	いいえ	668 (74.7)	159 (67.1)	509 (77.5)			
短い時間で献血できる	はい	379 (42.4)	115 (48.5)	264 (40.2)			0.026 *
	いいえ	515 (57.6)	122 (51.5)	393 (59.8)			
(再掲) 女性のみ							
献血会場が身近にある	はい	250 (41.2)	118 (52.4)	132 (34.6)			<0.001
	いいえ	357 (58.8)	107 (47.6)	250 (65.4)			
誘い合う家族・仲間がいる	はい	245 (40.4)	108 (48.0)	137 (35.9)			0.003 **
	いいえ	362 (59.6)	117 (52.0)	245 (64.1)			
献血会場に入りやすい雰囲気	はい	329 (54.2)	130 (57.8)	199 (52.1)			0.175
	いいえ	278 (45.8)	95 (42.2)	183 (47.9)			
献血情報を得る機会が増える	はい	170 (28.0)	73 (32.4)	97 (25.4)			0.062
	いいえ	437 (72.0)	152 (67.6)	285 (74.6)			
短い時間で献血できる	はい	283 (46.6)	111 (49.3)	172 (45.0)			0.304
	いいえ	324 (53.4)	114 (50.7)	210 (55.0)			

\*:  $p < 0.05$  \*\*:  $p < 0.01$

26) 学部区分別の献血を他者に勧めた経験と勧めた人

献血を他者に勧めた経験が「ある」と答えた者は、看護学生の方が他学部生と比較して有意に多かった ( $p < 0.001$ )。また、勧めた人については、学部区分別で有意な差は見られなかった。

表 17 学部区分別の献血を人に勧めた経験

項目	合計		看護学生		他学部生		p値
	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	
献血を他の人に勧めている	はい	104 (11.7)	52 (22.3)	52 (8.0)			<0.001
	いいえ	783 (88.3)	181 (77.7)	602 (92.0)			
献血を他の人に勧めている (女性のみ)	はい	87 (14.5)	50 (22.6)	37 (9.7)			<0.001
	いいえ	514 (85.5)	171 (77.4)	343 (90.3)			

表 18 学部区分別の献血を勧めた人との関係

項目		合計		看護学生		他学部生		p値
		人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	
1. 家族	はい	34 (32.7)	21 (40.4)	13 (25.0)			0.094	
	いいえ	70 (67.3)	31 (59.6)	39 (75.0)				
2. 親戚	はい	2 (1.9)	2 (3.8)	0 (0.0)			0.248	
	いいえ	102 (98.1)	50 (96.2)	52 (100.0)				
3. 友人	はい	88 (84.6)	44 (84.6)	44 (84.6)			1.000	
	いいえ	16 (15.4)	8 (15.4)	8 (15.4)				
4. 恋人	はい	11 (10.6)	7 (13.5)	4 (7.7)			0.339	
	いいえ	93 (89.4)	45 (86.5)	48 (92.3)				
5. 同僚・職場の人	はい	2 (1.9)	1 (1.9)	1 (1.9)			1.000	
	いいえ	102 (98.1)	51 (98.1)	51 (98.1)				
6. 知人	はい	4 (3.8)	3 (5.8)	1 (1.9)			0.309	
	いいえ	100 (96.2)	49 (94.2)	51 (98.1)				

27) 学部区分別の献血を勧めない理由

献血を勧めない理由について、他学部生の方が看護学生と比較して「自分も献血をしたくないから」の選択肢を選んだ者の割合が有意に多かった ( $p < 0.01$ )。

表 19 学部区分別の献血を勧めない理由

項目	合計		看護学生		他学部生		p値
	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	
なんとなく	はい	270 (38.9)	69 (42.9)	201 (37.7)			0.241
	いいえ	424 (61.1)	92 (57.1)	332 (62.3)			
自分も献血をしたくないから	はい	150 (21.6)	23 (14.3)	127 (23.8)			0.008 **
	いいえ	544 (78.4)	138 (85.7)	406 (76.2)			
忘れてしまう	はい	95 (13.7)	24 (14.9)	71 (13.3)			0.608
	いいえ	599 (86.3)	137 (85.1)	462 (86.7)			
面倒くさい	はい	92 (13.3)	16 (9.9)	76 (14.3)			0.157
	いいえ	602 (86.7)	145 (90.1)	457 (85.7)			
勧める相手がいない	はい	68 (9.8)	12 (7.5)	56 (10.5)			0.253
	いいえ	626 (90.2)	149 (92.5)	477 (89.5)			

\*:  $p < 0.05$  \*\*:  $p < 0.01$

28) 学部区分別の献血啓発への意欲

学部区分別の献血啓発活動への意欲について、看護学生の方が「参加したい」と答えた者が有意に多かった ( $p < 0.001$ )

表 20 学部区分別の献血啓発への意欲

項目	合計		看護学生		他学部生		p値
	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	
献血を広める活動に参加したい (N=848)	はい	356 (42.0)	130 (59.9)	226 (35.8)			<0.001
	いいえ	492 (58.0)	87 (40.1)	405 (64.2)			
献血を広める活動に参加したい (女性のみ)	はい	284 (49.9)	126 (61.5)	158 (43.4)			<0.001
	いいえ	285 (50.1)	79 (38.5)	206 (56.6)			

考察

これまでに献血経験のある者は回答者全体の 14.7% であったが、そのうち半数以上が献血回数 1 回と回答しており、多くが継続的な献血行動に至っていない状況である。

初めて献血した平均年齢は 18.4 ± 1.8 歳であった。献血行動をとる若者は、高校卒業前後に開始していると考えられるため、高校在学中に献血の意義や具体的な献血の流れを、視覚的情報を用いて分かりやすく情報提供することが有効であると考えられる。

献血できなかった経験のある者は 193 名 (21.2%) であった。その理由として体重や血色素量の不足、服薬等の身体的理由が大半であった。体重や服薬等の採血基準の周知とともに、青年期の健康管理という観点からも、血色素量を高める食生活改善に向けた働きかけが必要である。

献血車等の情報入手経路の上位 3 項目は、「ポスター」(45.6%)、「口コミ」(21.3%)、「ネット・スマホ・携

帯」(13.2%)であった。献血したいと考える者は、インターネット等で積極的に献血場所等の情報を得ていると考えられるが、自ら情報収集しない者にも働きかけることができるのは普段目に触れる「ポスター」や、友人からの「口コミ」であることが示唆された。

献血を敬遠する理由で最も多かったのは「なんとなく不安」であり、献血を他の人に勧めない理由も「なんとなく」であった。このような漠然とした不安や抵抗感を払拭するためのアプローチが必要であると考えられる。「献血をする人が増えると思う取り組み」において、施設や時間というハード面に次いで多かったのは「誘い合う家族・仲間がいる」であった。また、献血を最も多く勧めているのは「友人」であったことから、友人同士で誘い合って献血に行くことのできる環境づくりが重要である。

学部区分別の比較において、看護学生は献血経験者が有意に多く、献血ルーム等の場所や基準値に関する知識を有する割合も有意に高く、実際に他者に献血を勧めていたり、献血啓発活動に興味を示すなど、献血に対する関心の高い集団であると言える。献血に関する情報の入手経路は学部区分別に差がみられたことより、対象とする集団の特徴を捉えた情報提供方法を検討する必要がある。

看護学生は献血に関心はあるものの、時間と場所というハード面の理由から献血を敬遠している者が多い。また「ポスター」など直接目に入る媒体から献血の情報を得ていた。このことから大学等アクセスのよい場所に献血バスを配車し、配車前にポスターを提示することで、献血行動へのアクセスが高まると考えられる。

他学部生はインターネット・携帯・スマートフォンなどの媒体を駆使して情報収集を行っていた。このことから、学生が良く見るサイトにバナー広告を掲示したり、大学のホームページに献血車情報を掲載するなど、インターネットを活用した情報提供がより有効であると考えられた。

以上の内容から、学部の特性を踏まえ多方面からの情報提供を行い、献血に関心の高い看護学生が啓発活動を行うための基盤を整え、学生同士の啓発活動を推進することで、若者の献血行動の促進につながると考えられた。

## II. 献血ボランティア養成講座の開催・ 学生ボランティアによる献血啓発活動

### 1. 献血ボランティア養成講座の開催

大阪府赤十字血液センター、大阪府藤井寺保健所と共催し、2017年8月31日にA大学学生向けに献血ボランティア養成講座を実施した。DVD「アンパンマンのエキス」を上映し、パンフレットを基に献血の歴史や現在の献血の需給状況についてご報告いただいた。7名の学生が参加し熱心に聴講し、献血の基本理念や目的について学ぶ機会となった。

参加後の学生の感想文を抜粋して以下に示す。

赤十字の成り立ちや、最近のニュースに絡めて臓器移植の内容や献血の目的を写真を通してお話ししていただき、初めて知る事柄も多かったですが、大変イメージしやすく学びの多い1時間でした。

献血の安全性を裏付ける法律の基本理念や目的を学び、採血者と利用者両方の安全を守ることが大切だと感じました。そして、若い世代の献血者を確保することが今後の課題であると学びました。

ボランティアなどを通して改めて献血の重要性を広めて行きたいと思いました。自分の仲のいい友達や家族に勧めることによって、その人たちからまたほかの人に広まることもあると思うので、一緒に行こうと誘ってみようと思いました。

保健所の方のお話では、認定を受けているところであれば、薬局でも説明やサポートをしてもらえるとという取り組みについて初めて知り、多くの人にその存在を知ってもらうことで献血者の増加につながって欲しいと思いました。

### 2. 学生ボランティアによる献血啓発活動

#### 1) 学内での活動

2017年6月27日に大A大学Zキャンパスに献血バスを配車した。配車時間は10:30～16:30。食堂や休憩時間の講義室で啓発を行い、当日は34名が受付、30名が採血を行った。



#### 2) 学園祭における啓発

2017年11月4日(土)、5日(日)に行われた学園祭に献血バスを配車し、ボランティア学生が呼び込み、チラシ配布などの啓発活動を行った。

当日は学生自身で“一度の献血バスの配車につき献血者数50人”の目標を設定し、献血啓発活動を実施した。1日につき先着50名に美術部学生とコラボレーショ



ンして作成したオリジナルグッズを抽選で記念品として贈呈。ポスターや SNS でその内容を周知した。

例年の学園祭での献血者数は 20 名に満たなかったが、4 日（土）67 名、5 日（日）63 名が献血し、両日とも目標を達成することが出来た。

### 3) 学内での予算獲得と自主グループ化

ボランティア学生は、2017 年度 A 大学後援会が実施する「社会に貢献する個性ある学生のチャレンジを支援する事業」に応募した。プレゼンテーションでは、日本の献血の現状と課題、A 大学での献血バス配車による献血者数、献血ボランティア活動内容等を報告し、採択された。

その後学生自身で献血啓発活動目標を立案した。目標達成のための具体的な方法として、情報提供による献血への不安の除去、献血を行うきっかけづくり、情報の拡散力のある SNS を活用した活動、などを行っている。

2017 年度は事業予算を基に作成した、オリジナルグッズの配布が非常に好評であった。学生の活動が自主化しつつあるので、こうした活動を後方支援しながら学生同士で献血を啓発しあえる環境を醸成していきたいと考えている。

## 健康危険情報

該当なし

## 研究発表

### 1. 論文発表

該当なし

### 2. 学会発表

#### I. 献血・輸血に関するアンケートについて

眞壁美香, 大川聡子, 安本理抄, 根来佐由美, 上野昌江, 大学生の献血に関する実態及び意識—看護学生と他学部生の比較—, 日本地域看護学会第 20 回学術集会, 大分, 2017.

## 知的財産権の出願・取得状況（予定を含む）

該当なし